

安城市東町・姫小川町・小川町

地元説明会資料

ひめした

姫下遺跡

令和8年3月14日（土）11:00～



25B区より北西を望む（南東から撮影）

制作・編集



公益財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団
愛知県埋蔵文化財センター
〒498-0017 愛知県弥富市前ヶ須町野方802-24
【調査課】Tell: 0567-67-4163 Fax: 0567-67-3054
<http://www.maibun.com>



公式X（旧Twitter） 公式Instagram

調査支援



株式会社島田組
〒581-0034 大阪府八尾市弓削南3-20-2
Tell: 072-949-2410
<https://shimadagumi.co.jp>



ホームページ

ひめしたいせき がいよう 姫下遺跡の概要

周辺の地形

姫下遺跡が所在する安城市東部は、ほぼ南北に流れる^{かのりがわ}鹿乗川の両岸で地形が異なります。

鹿乗川の西岸は、^{へきかいだいち}碧海台地と呼ばれる標高の高い（約12m）地形が広がります。この台地上には、古墳がいくつもみられ、^{さくらいこふんぐん}桜井古墳群と呼ばれています。姫下遺跡の西には、^{こふんじだい}古墳時代前期（4世紀前半・およそ1,700年前）の^{ぜんぼうこうえんふん}前方後円墳、^{ひめおがわこふん}姫小川古墳（国指定史跡・全長65m）があります。

対して、鹿乗川の東岸は、標高が低い^{ちゅうせきていち}沖積低地です。姫下遺跡も低地に立地しており、遺跡周辺の標高は約7mです。この沖積低地には、鹿乗川に沿って遺跡が連続しており、^{かのりがわりゅういきいせきぐん}鹿乗川流域遺跡群と呼ばれています。鹿乗川流域遺跡群は、北群と南群に分けられています。とくに北群は、桜林小学校付近の、東鹿乗川と西鹿乗川が合流するあたりで最も遺跡が集中しています。姫下遺跡は南群に含まれ、北には^{むかいだいせき}向田遺跡があり、南には^{よせじまいせき}寄島遺跡があります。

以上から、鹿乗川の周辺は、古くから人々の活動が続けられている地域ということが出来ます。

過去の発掘調査

姫下遺跡の発掘調査は、昭和48年の安城市教育委員会による調査に始まります。近年では、愛知県埋蔵文化財センターが、平成12年度より、鹿乗川流域遺跡群の調査を継続して行っています。

姫下遺跡のこれまでの調査成果として、断続的ではあるものの、^{やよいじだい}弥生時代から明治にかけての遺構・遺物が見つかっています。

今年度の発掘調査

今年度の発掘調査は、調査場所が【25A区】と【25B区】の2箇所あり、それぞれを「a区・b区・c区・d区」に4分割して行いました。また、遺構を確認する面（高さ）を2箇所設定し、時期が新しい面（現在の地面から浅い）を<第1面>、時期が古い面（現在の地面から深い）を<第2面>と呼んでいます。本日は、B区のいちばん南にあたる、Bd区の第2面をご覧いただけます。



25A区より北を望む（南から撮影）



姫小川古墳（南東から撮影）

ちょうさせい
25A区の調査成果



木製品の集中出土

古墳時代前期～中期ごろの川の流れ
(幅 20～30メートル)



土器の集中出土



江戸時代の溝跡



まがたま りょくゆうとうき
勾玉・緑釉陶器

今年度調査した部分
0 S=1:500 25m



流路跡完掘 (南西から撮影)



はそう
礎

せいせん
井泉 (古墳時代初頭～前期)

祭祀 (おまつり) に用いられる井戸で、規模が大きく、祭祀に関連する遺物が出土するなどの特徴があります。

この井泉は径3メートルで、井戸の壁を保護する木組みが残っていました。

また、掘り上げた土のふるいがけを行ったところ、銅やじりの鏝やガラス製の小玉が出土しました。



井泉 (西から撮影)



井泉 (北から撮影)



井泉 (南から撮影)



どうぞく
銅鏝・ガラス小玉



井泉周辺で出土した壺

25B区^{ちょうせい}の調査成果

第1面

第1面では、江戸時代以降の溝が6条見つかりました。

溝の向きは西北西—東南東を向くものが多く、現在の道路や水路とほとんど共通しています。出土する遺物の時期は、江戸時代・明治・昭和とさまざまなことから、江戸時代以降の地割が現在も続いていると想定されます。

第2面

第2面では、平安時代以降の溝、古墳時代前期の溝、水田の跡、畑の畝溝が見つかりました。

平安時代以降の溝からは、灰釉陶器（当時の食器）が出土しました。

古墳時代前期の溝からは、たくさんの土器と白玉が出土しました。出土状況から、上流から流れてきたと想定されます。

時期ははっきりしませんが、25Ba区から25Bc区の中央部にかけては、人と牛の足跡がたくさん見つかり、水田が広がっていたと思われます。一方、25Bd区では、複数の畑の畝溝が見つかりました。

下層

第2面より下の層からは、遺構は見つかりませんでした。弥生時代中期の土器と石鏃（狩りの道具）が出土しました。また、噴砂（地震の痕跡）がはっきりと見えています。



25Bd区第1面 明治以降の溝（東から撮影）

第1面

25Ba区

25Bb区

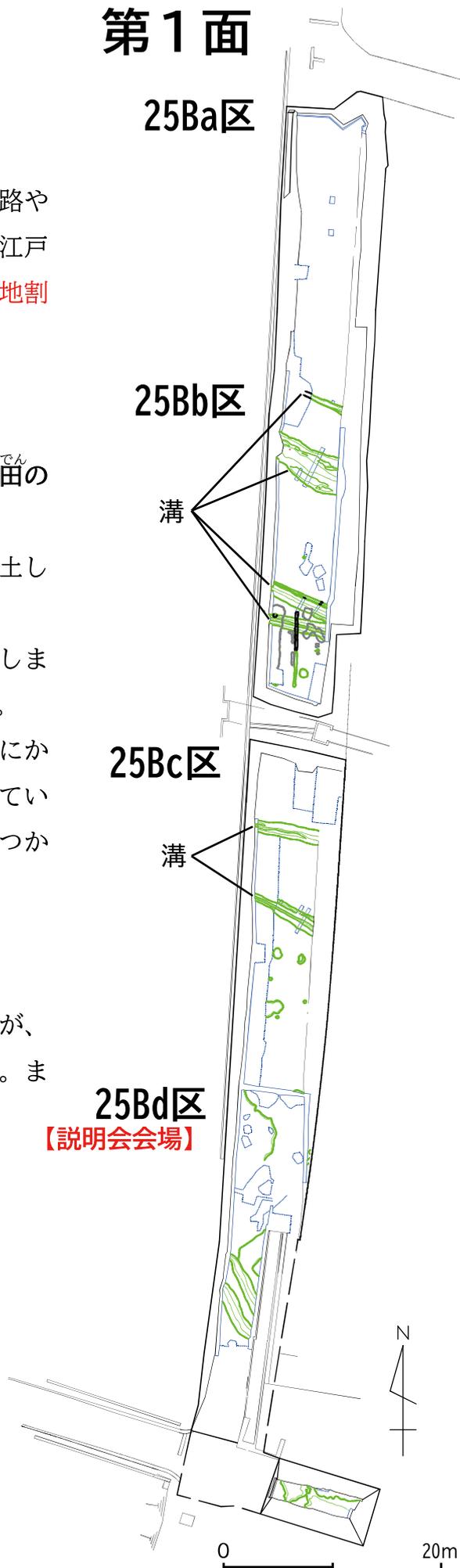
溝

25Bc区

溝

25Bd区

【説明会会場】





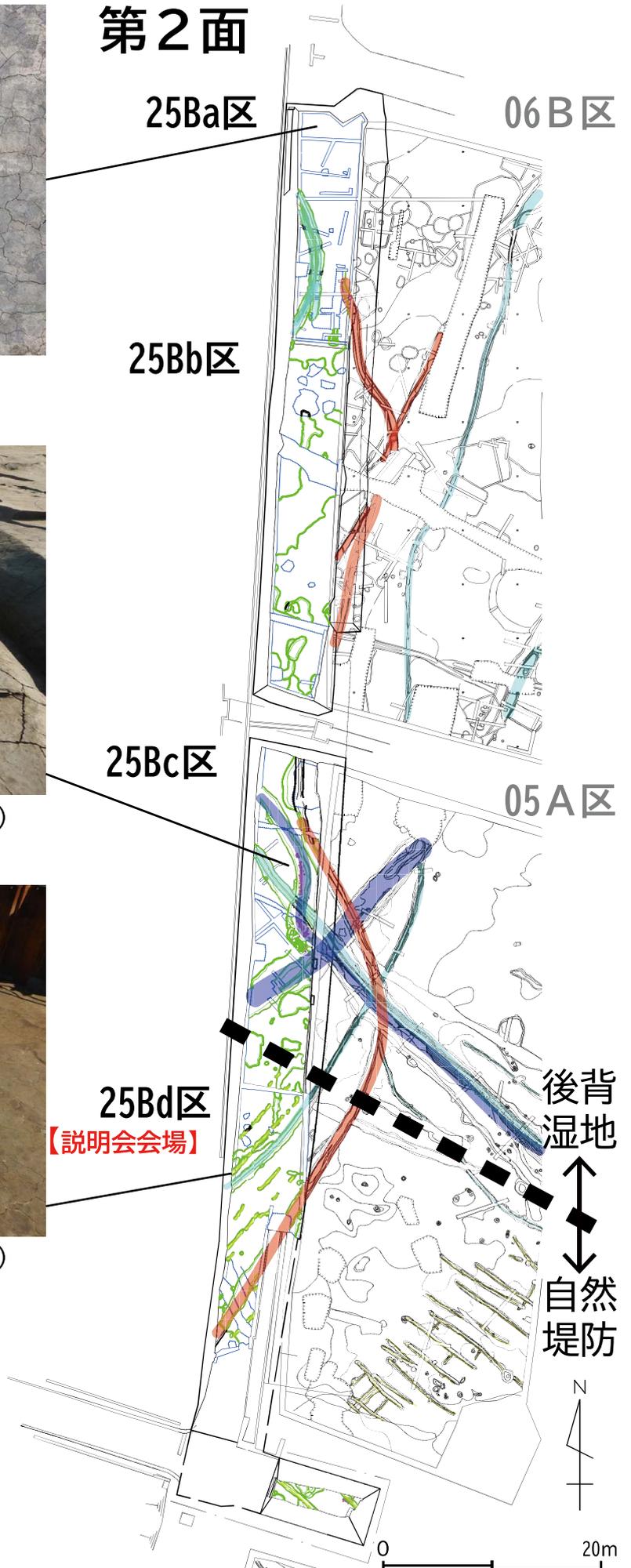
25Ba区第2面 足跡状遺構（水田跡）



25Bc区第2面 土器出土（北西から撮影）



25Bd区第2面 畑の畝溝（南西から撮影）



- 平安時代の溝
- 古墳時代の溝
- 畑の畝溝
- 時期不明の溝



25Bb区包含層 灰釉陶器



25Bd区第2面 平安時代の溝



25Ba区下層 石鎌



25Bc区下層 噴砂断面

今年度調査のまとめ

これまでの調査成果から、今年度調査区周辺の景観を復元してみます。

南には、25A区で確認された河道がほぼ東西方向に流れていました。そこから、北のB区へ進むにつれて砂の地面となり、畑地が営まれます。さらに北は、湿地状の堆積となり、水田が営まれていました。

これらは、それぞれの土地の土質に影響を受けたものと思われます。一般的に、河道の両側には、上流から運ばれてきた砂や泥がたまり、標高が高くなります（自然堤防^{しぜんていぼう}）。一方、自然堤防の外側は砂がたまらずに標高が低くなり、水はけが悪い湿地帯となります（後背湿地^{こうはいしっち}）。

よって、今年度調査区では、標高が高い自然堤防上で畑による作物栽培を行い、標高が低く水を引きやすい後背湿地で水田による農耕を行っていたということが出来ます。

当時の人々が、地形や土質の向き不向きを理解して、土地利用を行っていたと分かりました。

河道周辺の地形断面（イメージ）

